



自分で考え、自分で決められる子供に!

教諭時代にキャリア教育の研究にも取り組んでいましたが、将来を見据えて小学校から必要とされる力の中の一つに「人生や進路を、主体的に選択できる力」が挙げられていました。子供たちが生きる数十年後の社会を予想するのは難しいのですが「予測をはるかに超えていく出来事が次々と起きる社会」であることは間違いないでしょう。

「選択」研究の第一人者、コロンビア大学のシーナ・アイエンガー教授によると、一般的な人は1日に平均70の「選択」をしているそうです。1日に活動している時間が16時間だとすると、誰もが14分間に一つ、何かを「選択」していることになります。しかしこれは、「選択」を指折り数えながら1日を過ごした場合です。実際には日常の「選択」の90%は無意識に行われていると言われていています。つまり1日70の選択のうち「意識して選択している」ものはたった5~6に過ぎないのです。例えば、家に帰ってすぐ宿題に取り組んでいる子供もいれば、帰るなりタブレットでユーチューブを見ている子供がいるとします。前者は「勉強することを選択」し、後者は「動画を見ていること(勉強しないこと)を選択」しているのです。

ここで、「主体的に選択できる力を培う」ためには、指示・命令をやめ、「勉強するのかしないのか、しっかり考えてあなたが選んで」と自分で考えて、選択するように伝えることが必要です。ただし、「好き勝手にすれば」と突き放す行為は、NGです。親に守られているという前提があることで、子供は難しいことにチャレンジできます。また、選択に「優先順位」をつけることも時には、必要です。「勉強とユーチューブ、どちらをいつやるのかあなたが決めてね」「習い事の課題と学校の宿題、どちらをいつやるのかよく考えて決めてね」という順位の付け方です。社会学者キース・ロビンソン氏とエンジェル・ハリス氏らによれば「小学生時代に親がつきっきりで宿題を手伝っているほど、年齢が上がるにつれ学業成績が低下してしまう。」と述べています。その理由は、「親が手伝ってくれることに慣れてしまい、自分で考えたり工夫したりする力が培われないため」だそうです。子供を案じるあまりあれこれ手出し・口出ししていたら、かえってよくない結果を招いてしまうようです。

だからといって、子供を放置していいわけではありません。それは、勉強内容が身に付かない行動を繰り返しかねないからです。大切なのは、宿題をする理由を伝えたり、宿題の計画を一緒に立てたり、宿題をする環境を整えたりするなどの足場づくりなのです。

やるべきこと・やりたいことに優先順位を意識できるようになると、子供は効率的に複数のタスクをこなしていける術を身に付けます。自分の人生は、自身の選択の積み重ねによって形成されているのであれば、よりより選択を身に付ける術を小さいときから身に付けておく方が、明るい未来に近付けるのです。[Part2 に続く予定]

